

## 秦嘉の情詩について

福 山 泰 男

### はじめに

東漢後期の人とされる（伝記資料の検証は後述）秦嘉は、妻徐淑と詩文を応酬し夫婦ともに文学史にその名を刻む。残された作品によれば、秦嘉は郡の役人として、会計報告をするため都洛陽に出張することになった。しかし病気の妻徐淑を残して遠く去ることが中々できない。長期にわたる赴任の旅にあたり、夫婦は詩と書簡をそれぞれに贈り、互いの離れ難い思いを綴る。

秦嘉・徐淑の詩文から浮かび上がるのは、家族の病気や出張・単身赴任の悲哀という、どこにもでもある夫婦の日常である。とともに、夫と妻は対等の立場でお互いの思いを吐露する。「思う<sup>つま</sup>婦」から「征く夫」へという一方向ではなく、男女双方が抱く情愛や別離の不安・喪失感を詠い交わしている。その点において、夫妻の作品応酬は、漢魏にいたる文学因襲に新しい地平を開いたと言えよう。

秦嘉・徐淑の作品は、その真偽をはじめ検討すべき余地を尚残している。徐淑については別個の課題とし、ここでは、数編残る五言詩を中心に秦嘉を取り挙げ考察したい。秦嘉の情詩は、男の恋情を詠む五言詩の登場として先駆的であるのみならず、表現の独自性においても注目しうる。そのことは、自分の妻を個別・具体的に描く<sup>\*1</sup>だけでなく、後述するように、メトニミー（metonymy・換喩）を用いつつ、その女性像をより生彩・立体的に浮き上がらせる修辞法にも窺えよう。

以下、秦嘉の情詩について、その伝承、真偽および表現の特質を、書簡文や徐淑との関わりにふれつつ探ってみたい。

### 1 秦嘉の文学評価

秦嘉は、後述するように、唐、林寶『元和姓纂』巻2に「後漢上計掾秦嘉集，叙，皮仲固撰」の記述がわずかに残る以外、別集の記録がない。一方、徐淑は、「隋志」に「後漢黃門郎秦嘉妻徐淑集一卷」<sup>\*2</sup>が著録される。さらに、清、嚴可均『鉄橋漫稿』巻7<sup>\*3</sup>は、「後漢秦嘉妻徐淑傳」を収載し、夫婦が応酬した書簡文を『藝文類聚』『太平御覽』から輯佚、さらに諸書を引用し徐淑の伝記を編集した。ただし、夫妻が交わした書簡の多くは徐淑の書である<sup>\*4</sup>。徐淑の書簡は、巧みな修辞や古典の引用、内面の振幅を細やかに描く表現力等、秦嘉に比べより文彩に富んでいる<sup>\*5</sup>。ここでは省略するが、徐淑は、類書等に掲載される伝承が秦嘉より多い。別集の著録と伝記および文章から見れば、これまで秦嘉より徐淑の方が注目されてきたと言える。

では、詩人としての秦嘉・徐淑はどう評価されてきたか。夫妻は、南朝梁の鍾嶸『詩品』において、漢代の代表的五言詩作家として中品に選ばれ、詩史上に位置づけられている。鍾嶸『詩品』は次のように述べるが、現存詩を見る限り『詩品』の徐淑評に対し、これまでも疑問が呈されてきた。

士會夫妻事既可傷，文亦凄怨。爲五言者<sup>\*6</sup>，不過數家，而婦人居二。徐淑叙別之作，亞於團扇矣<sup>\*7</sup>。

士會夫妻の事既に傷むべく、文も亦た凄怨。五言を爲る者は數家に過ぎず、而して婦人二を居む。徐淑の叙別の作は、團扇に亞ぐ。

鍾嶸は、夫妻を対等に選び入れながらも、漢代五言詩における女性詩人の比重に注目し、徐淑に論評を加え、班婕妤に次ぐ作家であると述べる。しかし、班婕妤の五言詩については、つとに真偽を疑われている<sup>\*8</sup>。さらに、現存する徐淑詩は、「○○兮○○」の句からなる一首のみであり、しかも漢魏前後の五言詩にこのスタイルは他に見いだせない。

許文雨『文論講疏』は、「…他家の五言當時固より未だ此の種有らざるなり。…但や頗や疑う淑に本集一卷有り、已に佚す、其の中當に五言詩有るべきかと。（…他家五言當時固未有此種也。…但頗疑淑本有集一卷、已佚、其中當有五言詩歟。）」と述べ<sup>\*9</sup>、兮字を含む徐淑の現存する詩は当時の一般的五言型ではないとしている。このように徐淑に関する『詩品』の記述には様々な疑義が残る<sup>\*10</sup>。徐淑詩を五言詩史に置くことに疑問を呈する声は多く<sup>\*11</sup>、文学史書は、おおむね徐淑より秦嘉に着目している<sup>\*12</sup>。

ただし、詩形式以外で、徐淑詩のように連続して「○○兮○○」の句型を用いる例として、『楚辭』の王逸「九思」怨上・憫上・悼乱・哀歳が挙げられる。徐淑の兮字を含む五言型は、四言と五言の中間的な詩型とも見なしうるとともに、辞賦との関連も考えられよう。秦嘉は四言詩と五言詩を残しており、秦嘉・徐淑の詩作は、後漢時代における五言詩形成過程を考える上でも興味深い（別稿で論じたい）。

いずれにせよ、詩史上の評価は、徐淑ではなく秦嘉の五言詩の方に与えられてきた。しかし、なおその情詩について再評価の余地があるように思う。また、そもそもその真偽はどう検証しうるのか。次節は、秦嘉および関連する徐淑の伝記・伝承について若干の再検討を施したい。

## 2 秦嘉・徐淑の伝承

秦嘉詩のテキストは、梁・徐陵『玉台新詠』、唐・李善『文選』注、宋・姚寬（南宋末～北宋初め）『西溪叢語』に収録される。秦嘉の書簡は、隋・虞世南『北堂書鈔』、唐・歐陽詢『芸文類聚』、北宋・李昉『太平御覽』に見える。

秦嘉の伝記について以下、出典の時代順に列挙してみたい。なお、秦嘉との関連から、必要に

応じ徐淑に関する伝記資料も示す。

○『玉臺新詠』巻1

秦嘉，字士會，隴西人也。爲郡上掾。其妻徐淑，寢疾還家，不獲面別。贈詩云爾<sup>\*13</sup>。

秦嘉，字は士會，隴西の人なり。郡の上掾と爲る。其の妻徐淑，疾に寝ねて家に還り，面別するを獲ず。詩を贈り爾<sup>しか</sup>云う。

○『詩品』中

漢上計秦嘉，嘉妻徐淑詩<sup>\*14</sup>。

漢の上計秦嘉，嘉の妻徐淑の詩。

○唐，杜佑『通典』巻69所引「賀喬妻子氏上表」

東晉成帝咸和五年，散騎侍郎賀喬妻子氏上表云……漢代秦嘉早亡，其妻徐淑乞子而養之。淑亡後，子還所生。朝廷通儒移其鄉邑，錄叔所養子，還繼秦氏之祀。……<sup>\*15</sup>

東晉の成帝咸和五年，散騎侍郎賀喬の妻子氏上表して云う……漢代の秦嘉早に亡く，其の妻徐淑子を乞いて之を養う。淑亡き後，子生れし所に還る。朝廷の通儒其の郷邑を移し，叔の養う所の子を録し，還た秦氏の祀を繼がしむ。……

○唐，林寶『元和姓纂』巻2

後漢上計掾秦嘉集叙，皮仲固撰<sup>\*16</sup>。

後漢の上計の掾秦嘉集叙，皮仲固撰。

○『太平御覽』巻400「人事部」41「凶夢」所引「幽明録」

隴西秦嘉字士會，雋秀之士。婦曰徐淑，亦以才美流譽。桓帝時嘉爲曹掾赴洛，淑歸寧于家。晝卧流涕覆面，嬖恠問之。云，適見嘉，自說往津鄉亭病亡，二客俱留一客守喪，一客賣書還。日中當至，舉家大驚。書至事事如夢<sup>\*17</sup>。

隴西の秦嘉字は士會，雋秀の士なり。婦は徐淑と曰い，亦た才美を以て譽を流す。桓帝の時嘉曹掾と爲り洛に赴き，淑家に歸寧す。晝に卧し流涕して面を覆うに，嬖恠<sup>あによめあや</sup>しみて之に問う。云う，適たま嘉を見る，自ら津郷亭に往き病みて亡ず，二客俱に留まるに一客喪を守り，一客書を賣<sup>もたら</sup>して還ると説く，と。日中當に至り，家を舉げて大いに驚く。書至れば事事夢の如し。

○『西溪叢語』巻下<sup>\*18</sup>は、『玉臺新詠』巻1と同一記載。

秦嘉・徐淑に関する古い伝承は，上記の『通典』に引かれる「東晉の成帝咸和五年」作の「散

騎侍郎賀喬の妻子氏」による上表文である。ここでは、夫秦嘉の早世、妻徐淑が貰い受けた養子の継嗣問題という、一家族をめぐる諸事情についてふれている。東晋初め、咸和五年（330）の頃、秦嘉・徐淑夫婦の故事は、上表文に引用されるほど広く公的にも認知されていたのであろう。またこの短い記述から、当時、秦嘉・徐淑という個人とその家庭内問題について、具体的な伝承がなされていたことが推察できる。

この上表文は、徐淑と同様の問題に直面した賀喬の妻子氏が、（夫亡き後、貰い受けた兄弟の子を実子としたい旨）上訴したものであるが、個々の家族にまつわる女性の境遇が時を隔て相響いていると言えよう。秦嘉・徐淑夫妻の記録は、具体性・個性性を帯びつつ伝承されていったのである。

上記の資料以外に、主として徐淑に関わる伝記は、『史通』巻8「人物」をはじめ散見されるが、ここでは論旨の上から省略したい。ただし一点言及すれば、『太平御覽』所引の杜預「女記」は、寡婦、徐淑が兄弟に与えた書簡を収載する。秦嘉・徐淑の作品伝承は、現存資料から、杜預の生きた三国魏代の頃まで遡及できよう。

ただし、前掲資料『元和姓纂』巻二によれば、後漢の皮仲固が「上計掾秦嘉集」叙を撰したとある。それによれば、秦嘉の作品は、徐淑の作品が、三国期の杜預「女記」に収載されるより前に、すでに伝承・収集されていたことになる。しかし、「秦嘉集」は他の図書目録には見えず、その存在が事実とすれば早く佚したと考えるほか無い<sup>\*19</sup>。この『元和姓纂』の記述は、後漢時代、秦嘉が早世した後かなり早い時期に、「秦嘉集」が編纂されていた可能性を示していると言えよう。

さて、先に掲げた資料は、「秦嘉、字は士會、隴西の人」、「漢の上計秦嘉」、「漢代秦嘉早に亡し」、「隴西の秦嘉字は士會、雋秀の士」、「桓帝の時嘉曹掾と爲り洛に赴く」、「後漢の上計の掾秦嘉集」と記す。それらは、秦嘉字士會は、東漢、隴西の人で妻は徐淑、上計（上掾）に任じ上洛するが客死したことを伝えている。その他、妻との情愛と別れ、家族をめぐる事情については、夫妻の残した詩文から窺うことになる。

前掲資料で、秦嘉の活動時期を明示するのは、『太平御覽』巻400所引「幽明録」の記述であり、それによれば、秦嘉は「桓帝の時」（147～167）の地方官吏である。嚴可均「全後漢文」やその後の諸書に「桓帝の時」と記すが、典拠は明記されていない<sup>\*20</sup>。「幽明録」に「桓帝の時」と記される以外、秦嘉・徐淑の生きた年代を知りうる資料は無い。『隋書』経籍志<sup>\*21</sup>及び『玉臺新詠』は、その目録・作品の配列のしかたから、秦嘉・徐淑を、班昭や張衡以後、蔡琰以前の詩人と捉えていたことになる。

以上、後漢、皮仲固撰「後漢上計掾秦嘉集」叙の記述や、魏晋期にすでに具体的伝承が見られる点等から、秦嘉・徐淑夫妻は早くからその名跡を知られていたことが推測できる。では、夫妻の作品を後漢末前後の文学史に組み入れることは可能か。次節では、もう少しその傍証となる事跡に目を向けてみたい。

### 3 上計の文化的文学的機能

前節に掲げた秦嘉の伝記資料では、秦嘉の官職に関し、『詩品』『元和姓纂』は「上計」、『玉台新詠』は「上掾」と記し、『西溪叢語』は、「一作計」と注する。このことについて遼欽立は、夫妻の交わした書簡は秦嘉が職務で郡から京師に詣ると述べるが、これは漢の法制における上計の仕事である、と説いている<sup>\*22</sup>。上計の職務は、会計簿を郡から中央に提出するのみならず、朝廷に参内して地方の政治・風俗を報告し、さらに中央の詔勅を地方に伝達する職責も兼ねていた。

秦嘉が妻に与えた書簡を見ると「志を養う能わず、當に郡使に給すべし。(不能養志、當給郡使。)',「又往還を計るに、將に時節に彌らんとす。(又計往還、將彌時節。)」<sup>\*23</sup>とあり、徐淑の夫への返書に「應に歳使を奉ずべし。名を王府に策し、国の光を觀ん。(應奉歳使。策名王府、觀國之光。)',「今樂土に適き、京邑に優游せん。王都の壯麗を觀て、天下の珍妙を察せん。目の遊び意の移り、往きて出づる能わざること無きを得んや。(今適樂土。優游京邑。觀王都之壯麗。察天下之珍妙。得無目玩意移。往而不能出耶。)」<sup>\*24</sup>と見える。「郡使」「歳使」「往還」という言葉や「京邑に優游せん。王都の壯麗を觀て、天下の珍妙を察せん。」という表現から、秦嘉の官職は『詩品』『元和姓纂』に言う「上計」と捉えるべきであろう。

さて、先に簡単に示した上計とはいかなる職務か。このことは、秦嘉の文学および徒詩五言詩の形成、ひいては後漢の文学環境を考える上で重要な意味をもつと考えられる。以下、嚴耕望『中国地方行政制度史——秦漢地方行政制度』第八章「上計」<sup>\*25</sup>の記述から、漢代における上計の職責・機能について引用、要約してみたい。嚴耕望が使用した史料の例示は省略する。

#### (1) 上計制の起源

毎年歳終、中央に会計報告をする上計制度の起源は、集権国家形成過程にあった戦国時代にさかのぼる。

#### (2) 漢代における2種類の上計制度とその時期

上計の任務時期には、毎年1回あるいは3年に1回行う場合の2通りがある。

#### (3) 計簿内容

県の戸口、墾田、賦税の収支、盜賊の多少を計り中央に報告。郡国における宗室の状況、裁判や軍兵の実態、山林沼沢や関所・貿易の利、さらには地理の変遷など、地方の事情一切を計簿に記録、報告する。

#### (4) 上計官吏

前漢においては、郡の丞国・長吏が中央に計簿を奉じた。後漢の上計は地位が高く、本郡から才俊を選任した。上計は中央から重んじられ、時に郎を拜して官に除せられることもあった。

#### (5) 上計の職責

上計は計簿を奉上するのみならず、守相を代表して郡の政治・民情を備に報告する。一方、中

中央の詔勅を守相に伝える。

(6) 中央の治計機関

会計報告は司徒が受ける。

(7) 上計制の弊害

郡国の財政困難や民衆の貧苦が、上計の職務怠慢に起因することもある。上計の腐敗により、その選抜方法改正が模索されたが成功しなかった。

以上要するに、地方と中央の情報を結ぶ上計の職務は、中央集権国家形成途上の戦国時代に萌芽する。上計は、政治・経済、地理・民情等々、地方のあらゆる状況をほぼ毎年（時に三年に一回）中央に報告し、さらに中央から詔勅を拝し郡に伝える。後漢の上計は郡において地位が高く優秀な人材で、朝廷からも重んじられた。その職務遂行の良否が郡の政治・経済を左右するほど上計の責務は重かった。

以上のように、上計による中央への報告内容には、政治・経済のみならず官民にわたる様々な文化的情報も含まれていた。さらに、前出の「名を王府に策し、国の光を觀ん」、「今樂土に適き、京邑に優遊せん。王都の壯麗を觀て、天下の珍妙を察せん。目の遊び意の移り、…」という徐淑の書簡文にも注目したい。上計は、「壯麗」「珍妙」な「國の光」たる中央文化に接し、その情報を地方に持ち帰る役割を担っていたと推察できる。上計は、郡の才俊であり、中央と地方の文化的情報を媒介・連絡するに足る高い教養を身につけていたであろう。このように上計は、官僚としての重責を負いつつ、情報・文化における流通・伝播の一翼を担っていたと考えられる。このことは同時に、統一国家において、中央と地方の文化的格差を縮める作用の一部を上計が負っていたことを意味する。

前出のように、『太平御覽』卷400「人事部」41「凶夢」所引「幽明録」に、「桓帝の時嘉曹掾と爲り洛に赴き、淑家に歸寧す。」とあり、秦嘉は上洛した後死したと考えられる<sup>\*26</sup>。したがって秦嘉は洛陽において実際に上計の任に当たっていたであろう。さらに、上計による情報伝達について言えば、中央における直接の報告のみならず、文書や書簡のかたちで地方に伝わることもあったであろう。それには、当時の郵便制度が大きく与ったはずである。

佐藤武敏『中国古代書簡集』は、<戦国時代に通信制度が盛んになり、公のものだけでなく、私人の情報伝達組織もあった。秦代に馳道が設けられ、漢代に駅・郵の整備がなされた。>と述べている<sup>\*27</sup>。統一国家における文化の伝播やその格差縮小という問題にとって、上計という職能とともに、広く郵便制度による情報ネットワークの整備がなされていたことに留意する必要がある。秦嘉・徐淑は、相離れた地点から書簡と五言詩等を応酬したが、その成立背景には郵便制度の整備があったと考えられる。とりわけ徒詩五言詩は後漢においてまだ形成途上にあった。そのことをふまえれば、郵便制度は、後漢時代の樂府・歌謡と異なる（手紙のように書かれた）五言徒詩の形成、流通と密接に関連していると言えよう。

漢による国家統一が様々な文学上の統一をもたらした点について、章培恒・駱玉明主編『中国文学史』は、次のように概観している。〈戦国時代の多地的地域文学は相互に影響・融合し、『楚辞』は漢賦に、楚歌は五言詩等に、戦国時代の散文は政論へと、漢代の様々な文学様式として吸収・統一されていった。漢朝は、地域による多元化から国家による一元化を文学にもたらした\*28。〉しかし、「地域による多元化から国家による一元化」を実際に文学にもたらすためには、政治・社会の統一化のみならず、文化・情報の流通、均一化が必要となる。そのような機能の一部分を担うものとして、上計や郵便の制度を捉えることができるのである。

このように上計制度は、郵便の整備とも相俟って、秦嘉・徐淑の文学が生み出された社会的文化的背景を見る上で重要な意味をもっている。

ここでさらに、上計の文化的・文学的機能を考える上で、後漢末、蔡邕と同時代の人と考えられる趙壹に注目したい。趙壹は、上計として郡と洛陽を往来するが、その名望は京師をはじめとして広く士大夫間に高かった。趙壹の声誉は、自身の才覚や交友関係とともに、上計という職責による人的・知的交流がもたらしたともいえる。また、趙壹は、「刺世疾邪賦」という賦の中に、士大夫個人の窮達を述べる「秦客」「魯生」の五言詩二首を詠んでいる。士人の五言詩が、賦と同じように士人一個の内面を表白する様式となっていく上で、趙壹詩は文学史上先駆的意義がある\*29。

秦嘉と趙壹はともに上計で、後漢末に先駆的な五言徒詩を残した点で共通する。さらに桓帝期の人と伝えられる秦嘉は、趙壹と活動時期にそれほど隔たりがない。また秦嘉は隴西、趙壹は漢陽と、ともに甘粛省の隣接する郡の人である。上計という役職、さらにそれを共通項として、ほぼ同時代同地域の趙壹を参照することは、秦嘉の文学をその真偽も含め検討する上でなお意義を有すると思う。秦嘉の情詩五言詩をもたらした文化的社会的背景は、上計という官職の機能とともに、後漢末、趙壹の文学活動との類推により、かなり具体的に示しうると言えよう。

#### 4 嫋々たる情愛表現

秦嘉と趙壹はともに隣接する地方の文人であるが、地方・周縁対中央・中心と単純に切り分けることはできない。両者とも上計という役職を通して文化的に中央とつながり、その文学活動をもたらす地域性はあまり重要ではない。両者の差異は、趙壹の方は、中央の文人やいわゆる清流派知識人と交流があり、その詩賦作品には政治的・公的な世界における士人としての感懐が述べられている。その一方、秦嘉は、妻との情愛がその作品世界のすべてであり、その五言詩は男の恋情を徹して詠む点に特異性がある。

無名氏による男女の掛け合いは『詩経』の時代からあり、漢代楽府にも散見される。また西晋、陸機「顧彦先の爲に妻に贈る（爲顧彦先贈妻）」二首、「陸思遠の妻の爲に作る（爲陸思遠妻作）」のように、代作形式で別の夫婦間の情愛を詠む場合もある。しかし、秦嘉詩のように自ら妻への情愛を詠み、かつ作品に記名性を有する例は、その前後を見渡してもほとんど例がない。秦嘉詩

の表現の特異性について、さらに関連する書簡文を参照しつつ考えていきたい。

夫秦嘉は郡の会計役人として、会計報告をするため都洛陽に出張するが、病気の妻徐淑を残して離れ去ることをためらう。夫婦は、互いの恋々とした思いを綴り、詩と書簡をそれぞれに贈る。夫婦の書簡文は、嚴可均『鐵橋漫稿』が類書等から輯佚し「後漢秦嘉妻徐淑傳」中に掲載している。ここでは、『鐵橋漫稿』とその出典を適宜校合し、補訂を加え引用する。まず、夫婦の書簡を簡単に比較・検討してみたい。

まず、夫秦嘉の書簡<sup>\*30</sup>を掲げよう。

不能養志。當給郡使。隨俗順時。僂俛當去。知所苦故爾。未有瘳損，想念悒悒。勞心無已，當涉遠路。趨走風塵，非志所慕。慘慘少樂。又計往還，將彌時節。念發同怨，意有遲遲。欲暫相見，有所屬託。今遣車往。想必自力。

志を養う能わず。當に郡使に給すべし。俗に随い時に順う。僂俛としてに當に去るべし。苦しむ所を知る故のみ。未だ瘳<sup>おとろ</sup>え損なうこと有らざるに、想念<sup>ゆうゆう</sup>うこと悒悒たり。勞心已むこと無く、當に遠路を渉るべし。風塵を趨り走るは、慕う所を志すに非ず。慘慘として楽しみ少なし。又往還を計るに、將に時節に渉らんとす。念いは同じ怨みを發し、意<sup>こころ</sup>は遲遲たる有り。暫く相見えんと欲し、屬託する所有り。今車を遣わして往かしむ。必ず自ら力めんことを想う。

ここには、中央官界での仕事が厭でたまらず、残していく妻が恋しくてならない、公事よりも私的な情愛の方に耽溺する一人の男の姿が現れている。

妻の返書<sup>\*31</sup>を見てみよう。

知屈珪璋。應奉歲使。策名王府，觀國之光。雖失高素皓然之業，亦是仲尼執鞭之操也。自初承問，心願東還。迫疾惟宜抱歎而已。日月已盡，行有伴例。想嚴莊已辨，發邁在近。誰謂宋遠。企子望之。室邇人遐。我勞如何。深谷透迤，而君是涉。高山巖巖，而君是越。斯亦難矣。長路悠悠，而君是踐。冰霜\* 慘烈，而君是履。身非形影。何得動而輒俱。體非比目。何得同而不離。於是詠萱艸之喻，以消兩家之思。割今者之恨，以待將來之歡。今適樂土，優游京邑。觀王都之壯麗，察天下之珍妙。得無目玩意移，往而不能出耶。

珪璋に屈するを知る。應に歲使を奉ずべし。名を王府に策し、國の光を觀ん。高素皓然の業を失うと雖も、亦是仲尼執鞭の操なり。初め問を承けてより、心は東還せんことを願う。迫<sup>くる</sup>しき疾いは惟だ宜しく歎を抱くべきのみ。日月已に盡き、行くこと伴例有り。嚴莊已に辨じ、發し邁くこと近きに在るを想う。誰か遠きに宋<sup>お</sup>ると謂わん。子を企<sup>ま</sup>ちて之を望まん。室は邇<sup>ちか</sup>く人は遐<sup>とほ</sup>し。我が勞如何せん。深谷透迤たり、而して君は渉る。高山巖巖たり、而して君は越ゆ。斯れ亦難し。長路悠悠たり、而して君は踐む。冰霜慘烈たり、而して君は履む。身は

形影に非ず。何ぞ動きて輒ち俱にするを得ん。體は比目に非ず。何ぞ同じくして離れざるを得ん。是に萱艸の喩えを詠み、以て兩家の思いを消さん。今者の怨みを割きて、以て將來の歡を待たん。今樂土に適き、京邑に優游せん。王都の壯麗を觀て、天下の珍妙を察せん。目の遊び意の移り、往きて出づる能わざること無きを得んや。

はじめの数行部分は、「あなたの人柄は玉のように優れ、会計官として朝廷に名が残り、都で立派なお仕事をなさいます。大変苦勞の多いお仕事でしょうが、孔子が、『論語』述而篇で、正当な方法で富が得られるならば、鞭を振るう御者のような仕事でもやる、と言っている、そのような節操が大事ですよ。」と書いている。秦嘉は、苦勞の多い長期出張の愚痴や、妻と早く会いたい気持ちなどを綴った手紙を送ってきたのだが、徐淑はそれに対する返事の冒頭で、古典を引用しながら、夫を讃え励ましているのである。

往復書簡は、妻の方が夫の2倍以上の文章を綴り、表現も精彩に富んでおり、感情より心理の綾を具体的に述べている。徐淑は男女の別離を諦観を交えつつ描いているが、面白く感じられるのは、上記引用部の最後の部分である。「今あなたは楽しいところに行き、都でゆったりされ、大都會の壯麗さを見、天下の珍しいものを目にされます。見て楽しく心も興味のあるものに動かされるのでしょうか。出かけたなら、もうこちらに帰らないのではありませんか」と述べ、夫はもう帰って来ないのではないかと、拗ねるような調子で手紙を締めくくっている。旅立つ夫へ励ましを送る一方、残された妻として愚痴をもらすなど、徐淑の文章は、内面の振幅を描く表現力がある。

この二通の往復書簡からも、濃やかと呼ぶほかない夫婦の情が窺えるが、ここには社会のみならず文学においても強固に見られる、男らしさ女らしさという通念がほとんどあてはまらない。秦嘉はどこまでも妻が恋しくてならない。むしろ徐淑の方が、自らの喪失感と諦念を理知的に述べている。この両者の恋情には、「征夫」「思婦」という垂直的關係を超えた、男女の対等・水平的な情愛表現が見いだせるのである。

以上、書簡文の簡単な考察をふまえ、秦嘉の詩を検討していきたい。

### 贈婦詩三首并序<sup>33</sup>

秦嘉字士會，隴西人也。爲郡上掾。其妻徐淑，寢疾還家。不獲面別。贈詩云爾。

婦に贈る詩三首並びに序

秦嘉字は士會，隴西の人なり。郡の上掾と爲る。其の妻徐淑，疾に寝ねて家に還る。面して別るるを獲ず。詩を贈り爾云う。

其一

人生譬朝露	人生朝露の譬し
居世多屯蹇	世に居れば屯蹇多し
憂艱常早至	憂艱は常に早く至る

歡會常苦晚	歡會は常に晩きに苦しむ
念當奉時役	當に時役を奉ずべきを念い
去爾日遙遠	爾を去ること日びに遙かに遠し
遣車迎子還	車を遣わし子を迎え還らしめん
空往復空返	空しく往き復た空しく返る
省書情悽愴	書を省て情は悽愴たり
臨食不能飯	食に臨みて飯する能わず
獨坐空房中	獨り坐す空房の中
誰與相勸勉	誰と與に相い勸び勉めん
長夜不能眠	長夜眠る能わず
伏枕獨展轉	枕に伏して獨り展轉せん
憂來如尋環	憂い來り尋いで環るが如し
匪席不可卷	席に <small>むしろ</small> 匪ざれば <small>ま</small> 卷くべからず

例えば、下線部の句は、旧来の觀念から言えばまるで女性の口吻（「古詩」・樂府等の女性の語り参照）である。第二・三首も、夫から妻に寄せる切々たる慕情が詠まれる。姚寬『西溪叢語』は、秦嘉の「贈婦詩三首」其一を徐淑の作と誤認しているが<sup>\*34</sup>、このような、秦嘉詩の男女どちらの語り手が判別しにくい叙述からすれば無理からぬとも言えよう。このような秦嘉の一種嫵々たる情愛表現は、さらにどのように独自の修辭性を帯びていくのか。考察を進めたい。

## 5 メトニミー（換喩）による女性表現

夫の二通目の書簡<sup>\*35</sup>を参照したい。

車還空反，甚失所望。兼敘遠別。恨恨之情，顧有悵然。間得此鏡。既明且好。形觀文彩，世所希有，意甚愛之。故以相與。并致<sup>\*36</sup>龍虎組緹履一緡<sup>\*37</sup>，寶釵一雙，價值千金<sup>\*38</sup>好香四種各一斤。素琴一張，常所自彈也。明鏡可以鑒形，寶釵可以耀首，好香可以馥身<sup>\*39</sup>，麝香可以辟惡氣<sup>\*40</sup>，素琴可以娛耳。

車環り空しく返り，甚だ望む所を失う。兼ねて遠別を叙べん。恨恨の情，顧みて悵然たる有り。このころ間此の鏡を得たり。既に明らかにして且つ良し。形觀文彩，世の希に有る所，意甚だ之を愛す。故に以て相與う。並びに竜虎の組緹履一緡，ほうさい寶釵一雙，價值千金の好香四種各一斤を致す。素琴一張，常に自ら彈ずる所なり。明鏡は以て形を鑒るべく，寶釵は首を耀かすべく，好香は以て身をか馥らすべく，麝香は以て悪気を辟くべく，素琴は以て耳を娛しますべし。

訓読文の下線部は、妻へのプレゼントで、この短い書簡文では、贈り物の列挙とその意味づけがなされている。夫から妻への思慕という感情が物に転化、移入していると言えよう<sup>\*41</sup>。

秦嘉が妻に贈った詩の三首目を見てみたい。

其三

肅肅僕夫征	肅肅として僕夫征き
鏘鏘揚和鈴	鏘鏘として和鈴揚ぐ
清晨當引邁	清晨當に引き邁くべし
束帶待雞鳴	束帯して雞鳴を待たん
顧看空室中	<u>顧り看る空室の中</u>
髣髴想姿形	<u>髣髴として姿形を想う</u>
一別懷萬恨	<u>一たび別れて萬恨を懷き</u>
起坐爲不寧	<u>起坐爲に寧からず</u>
何用叙我心	何を用て我心を叙せん
遺思致歎誠	思を遺りて歎誠を致す
寶釵可耀首	<u>寶釵は首を耀やかすべし</u>
明鏡可鑒形	<u>明鏡は形を鑒みるべし</u>
芳香去垢穢	<u>芳香は垢穢を去り</u>
素琴有清聲	<u>素琴は清聲有り</u>
詩人感木瓜	詩人は木瓜に感じ
乃欲答瑤瓊	乃ち瑤瓊もて答えんと欲す
愧彼贈我厚	愧ず彼の我に贈ることの厚きを
慙此往物輕	慙ず此の往物の輕きを
雖知未足報	未だ報ゆるに足らざるを知ると雖も
貴用叙我情	用て我が情を叙するを貴ぶ

前半の下線部は、やはり語り手の性差を無化するような、伝統的に女性的と見なされやすい感情表現である。後半部の下線部は、書簡と対応するように贈り物の列挙という方法で妻への愛情を述べている。詩の中で、『詩経』衛風「木瓜」を引いているが、言うまでもなく、恋する男女が贈答品を応酬する習俗は、『詩経』以来の文学作品によく見られるものである。その意味で、秦嘉と徐淑の書簡及び詩に表れるプレゼントの羅列という表現方法は、既成の文学因襲に依拠したものと言えよう。

これに関連し妻の二通目の返書<sup>\*42</sup>を取り上げたい。

既惠音令，兼賜諸物。厚顧慙慙<sup>\*43</sup>，出于非望。鏡有文彩之麗，釵有殊異之觀。芳香既珍，

素琴益好。惠異物于鄙陋，割所珍以相賜。非豐恩之厚，孰肯若斯。覽鏡執釵，情想髣髴。操琴詠詩，思心成結。勅以芳香馥身，喻以明鏡鑿形。此言過矣。未獲我心也。昔詩人有飛蓬之感。班婕妤有誰榮之歎。

今君征未還，鏡將何施行<sup>\*44</sup>。素琴之作，當須君歸<sup>\*45</sup>。明鏡之鑿<sup>\*46</sup>，當待君還<sup>\*47</sup>。未奉光儀，則寶釵不列也。未侍帷帳，則芳香不發也。

今奉越布手巾二枚，細布鞵二量<sup>\*48</sup>。嚴器中物幾具<sup>\*49</sup>。旄牛尾拂一枚，可以拂塵垢<sup>\*50</sup>。金錯椀一枚<sup>\*51</sup>，可以盛書水。琉璃椀一枚<sup>\*52</sup>，可以服藥酒。

既に音令を恵まれ、兼ねて諸物を賜う。厚顧慇懃は、望みに非ざるに出づ。鏡に文彩の麗有り、釵かんざしに殊異の觀有り。芳香既に珍しく、素琴益ます好し。異物を鄙陋に恵まれ、珍とする所を割きて以て相い賜う。豐恩の厚に非ざれば、孰か肯えて斯くの若からん。鏡を覽て釵かんざしを執り、情想髣髴たり。琴を操り詩を詠じ、思心結を成す。勅たまむるに芳香の身を馥らすを以てし、喻すに明鏡かんがみの形を鑿るを以てす。此の言過てり。未だ我が心を獲ざるなり。昔詩人に飛蓬の感有り。班婕妤に誰榮の歎き有り。

今君往きて未だ還らず、鏡は將に何をか施行せん。素琴の作すことは當に君が歸るを須つべし。明鏡の鑿ることは、當に君が還るを待つべし。未だ光儀を奉ぜざれば、則ち宝釵列ねざるなり。未だ帷帳に侍せざれば、則ち芳香發せざるなり。今越布の手巾二枚、細布のべつ鞵二量を奉ず。嚴器中の物幾んど具わる。旄牛の尾の拂一枚、以て塵垢を拂うべし。金錯の椀一枚、以て書水を盛るべし。琉璃の椀一枚、以て藥酒を服すべし。

以上の引用は妻が夫の贈り物へ感謝を表しているが、物に託された夫の思いを感受し、それに対する感想や意見を、古典を引用しつつ理知的に述べている。下線部は夫のプレゼントで、さまざまな物品がそこに列挙されている。琴が必ずしも女性の専有物では無い以外、鏡やかんざし、芳香や化粧箱と化粧品、靴下等、すべて女性が用いる物、女性が身につける物すなわち女性に隣接しているものである。

それら女性に付帯する物は、後代の文学テキストにおいて、しばしば女性を比喩するもの、つまり換喩＝メトニミー（metonymy、物事の隣接性にもとづく比喩）により女性を描く時の道具として用いられてきた。このことを思い起こせば、秦嘉の詩と文に妻へのプレゼントが羅列されているが、これは、女性・妻を彷彿とさせる換喩として作用していると見ることも可能であろう。妻に贈った詩の三首目の下線を引いた5・6句目では、「君のいない部屋を振り返ると、君の姿かたちが髣髴として目に浮かぶ」と詠んでいる。そういうつながりから見て、その後の句で換喩を連ね、妻の姿をさらに立体的に描いていると考えられるのである。

秦嘉の詩文両方にわたる、執拗とも言うようなメトニミーの使用、女性に隣接する物へのこだわりには、どこかフェティシズムにつながるものすら感じさせる。東漢後末期の文学テキストにおいては、秦嘉・徐淑より少し後の詩人、徐幹や繁欽の作品に、女性に隣接するもの、女性

であることを示す比喩として鏡や櫛などが詠み込まれている<sup>\*53</sup>。しかし、それらはいずれも女性が語り手となっている。秦嘉のように男性の語りから女性に隣接する女性の日用品等を記述し、さらにメトニミーの手法により女性の存在を視覚的に描くのは、当時の文学にはほとんど見られない。このように、秦嘉は、執拗に女性の側に立って女性の姿形を描くことを通し、自分の恋心を表現しているのである。秦嘉の詩と書簡に見える以上のような特異な表現は、単なる贈り物のリストアップではなく女性を比喩するメトニミーであり、しいて言うならば、陶淵明の「閑情賦」等を連想させるような、フェティッシュな情愛描写と考えられよう。

付言すれば、秦嘉の文学は、妻徐淑という受容対象が無ければ存在しなかった。秦嘉は、恋慕する女性に寄り添うようにして詩文を創作しているわけであるから、徐淑の存在は、秦嘉のテキストにとり不可欠な前提であった。

## 結 語

秦嘉や徐淑の文学から読みとれるのは、伝統的な性差の観念を超えた、男女の表現の多元性・複雑性である。文学が、固定した性差の意識に新たな生命を吹き込んできた事実、改めて目を向ける必要がある<sup>\*54</sup>。秦嘉詩に見える一種翳々とした男の情愛表現は、その点において漢代詩の興味深い一面を示している。

書簡文を参照しつつ見ていくと、秦嘉の五言詩は、女性に寄り添うように女性の姿形を描き、さらに換喩の連用により男の切々たる眷恋を詠出していることが読み取れる。

秦嘉詩の相聞歌や艶情詩の系譜における位置づけ、さらに妻徐淑の書簡やその字字を含む特異な五言詩型の考察は稿を改めて述べたい。

## 註

- \* 1 亀山朗「秦嘉『贈婦詩』の漢代詩としての新しさ」(『高知大國文』19,1998)は、秦嘉の五言詩について「きわめて個別的な事柄が具体的に挙げられている」「それは当事者だけに限られた私的世界、極私的と言ってもよい世界」「そこに展開されるのは、夫婦二人だけの限定された世界」と述べている。7頁。
- \* 2 「後漢黄門郎丁廙集一卷」注「後漢黄門郎秦嘉妻徐淑集一卷」。『隋書』(中華書局, 1973) 経籍志, 1059頁。
- \* 3 東北大学付属図書館・狩野文庫所蔵『鐵橋漫稿』八卷(甲C・2・53) 卷8「後漢秦嘉妻徐淑傳」33葉右～36葉右。
- \* 4 「爲書與兄弟曰…」として、一部、徐淑が兄弟に与えた書簡を含む。『太平御覽』(中華書局, 1960) 卷441所引「杜預『女記』」, 2031頁。
- \* 5 『文選』李善注では、秦嘉が徐淑に贈った詩14例が引かれているのに対し、徐淑の方は、夫に与えた書簡文3例が見いだせるが、詩は引かれぬ。秦嘉詩14例中、五言詩12例、四言

詩2例。五言詩中、1例が「秦嘉婦詩曰～」となっているが、これは「秦嘉贈婦詩」の「贈」を落とした李善の引用ミスであろう。注10参照。

- \* 6 曹旭『詩品集注』（上海古籍出版社、1994）中（198頁）は、「二漢爲五言者」とし、「校異」において姚寬『西溪叢語』等の『詩品』の引用により「二漢」を付加すべきことについて考証する。一方、高木正一訳注『鍾嶸詩品』（東海大学出版社、1978）は、車柱環『鍾嶸詩品校證補』の説にもとづき、『西溪叢語』が「二京」（「二漢」の誤引）の字を「爲」の上に付加したのは誤りであるとする。『詩品』の序・本文より、「二漢」が無くとも、この条は漢代の五言制作者を述べていることが自明であることを理由とする。203頁。ここでは『詩品集注』が「二漢爲五言者」と作ることの是非について判断を保留し、「二漢」の字を加えない。
- \* 7 曹旭『詩品集注』中、197頁。
- \* 8 『文心彫龍』明詩篇等の記述による。
- \* 9 正中書局、1976、218頁。高木正一訳注『鍾嶸詩品』は、許文雨の見解を補足し、『文選』卷五十五に収録される劉峻「廣絶交論」の李善注に「秦嘉婦詩曰…」として引く二句を、亡佚した徐淑の詩と推定するが、これは李善注の誤引である。この二句は『玉臺新詠』が収録する秦嘉「贈婦詩」第三首中の句であり、李善注の「秦嘉婦詩曰…」は、「婦」の字を取る必要がある。
- \* 10 陳延傑注『詩品注』（人民文学出版社、1958）が、「秦嘉夫妻詩、皆未著其源流者、又一例焉。」（巻中、21頁）と指摘するように、鍾嶸『詩品』は、他の詩人をすべて「其源出於～」と評するが、両詩人についてはその源流を述べない。
- \* 11 現存の徐淑詩について、鄭賓于『中国文学流変史』（中州古籍出版社、1991）は、兮字は「代声」であり四言詩作品と捉える。第三章「詩的再造時期」第一節「兩漢の徒歌」二「論三言四言五言六言七言詩的繼起」B「四言」、237頁。章培恒・駱玉明主編『中国文学史』（復旦大学出版社、1996）は、騷体と通行の五言体が混合した形式と見る。上巻、第二編「秦漢文学」、第五章「東漢中期至后期的詩賦与散文」278頁。亀山朗注4前掲書は「実質的には四言と考えられる」と説く。7頁。
- \* 12 陸侃如『中国詩史』（中華書局、1956）は、秦嘉詩を五言詩の起源と見なす。268頁。游国恩等主編『中国文学史』（人民文学出版社、1963）、中国社会科学院文学研究所中国文学史編写組『中国文学史』（人民文学出版社、1985）は徐淑にふれず秦嘉のみ取り上げる。前者は、第一冊、第二編「秦漢文学」第五章「五言詩的起源和發展」第二節「東漢文人的五言詩」、210頁。後者は、第一冊、「秦漢文学」第六章「五言詩的成長」第一節「五言詩的興起和成長」204頁。
- \* 13 穆克宏點校『玉臺新詠箋注』（中華書局、1985）30頁。
- \* 14 曹旭『詩品集注』中、197頁。
- \* 15 1907～1911頁。

- \*16 『四庫全書』(文淵閣『四庫全書』電子版, 上海人民出版社, 迪志文化出版有限公司, 1999) 子部, 類書類。
- \*17 1850頁。
- \*18 中華書局, 唐宋史料筆記叢刊, 1993,113頁。
- \*19 姚振宗『後漢藝文志』(中華書局『二十五史補篇』二, 1986) にも収載される。121頁。
- \*20 陸侃如『中古文学繫年』(人民文学出版社, 1985) は, 「桓帝時」の典拠を『北堂書鈔』巻136とするが, 誤りである。214頁。
- \*21 注1 参照。
- \*22 『先秦漢魏晉南北朝詩』(中華書局, 1983) 漢詩巻6,186頁。
- \*23 『藝文類聚』(中文出版社, 1980) 巻32,571頁「後漢秦嘉與妻徐淑書」。
- \*24 『藝文類聚』巻32,571頁「秦嘉妻徐淑答書」。
- \*25 上海古籍出版社, 2007,257 ~ 268頁。
- \*26 『鐵橋漫稿』巻8「後漢秦嘉妻徐淑傳」は, 「嘉遂行入洛, 尋除黃門郎。居數年, 病卒于津郷亭。」と記す。ただし波線部の典拠は不明。35葉右。
- \*27 講談社, 2006,31頁。
- \*28 章培恒・駱玉明主編『中国文学史』(復旦大学出版社, 1996) 上巻, 179頁。
- \*29 趙壹については, 拙著『建安文学の研究』(汲古書院, 2012) 第二章「趙壹の詩賦について」参照。初出は, 『集刊東洋学』第64号, 1990。
- \*30 『藝文類聚』巻32,571頁「後漢秦嘉與妻徐淑書」。
- \*31 『藝文類聚』巻32,571頁「秦嘉妻徐淑答書」。
- \*32 『鐵橋漫稿』作「众霜」, 依『藝文類聚』。
- \*33 『玉臺新詠箋注』30 ~ 32頁。
- \*34 「秦嘉字士會隴西人也, …其妻徐淑…贈詩云, 人生譬朝露, 居世多屯蹇…。嘉報以詩云, 皇靈無私親, 爲善荷天祿…。」(姚寬『西溪叢語』〈中華書局, 1993〉巻下, 113頁。)
- \*35 『藝文類聚』巻32「嘉重報妻書」571頁。
- \*36 依『鐵橋漫稿』有二字「并致」。
- \*37 『藝文類聚』脱七字, 依『太平御覽』巻697 (3111頁)。
- \*38 『藝文類聚』脱四字, 依『太平御覽』巻718 (3182頁)。
- \*39 「馥身」, 『太平御覽』『鐵橋漫稿』作「去穢」, 依『藝文類聚』巻32 (571頁) 改。
- \*40 『藝文類聚』脱一句, 依『太平御覽』巻981 (4345頁)。
- \*41 亀山朗注1 前掲書は, 「贈り物のリスト・アップは, 事務的な無味乾燥な表現とは必ずしも言えないのではないか。両者の親密な関係性を基礎とするとき, ある種の確実性の高い愛情表現ないし好意の表現たり得ると思うからである。つまりこれもひとつの文体と考えたい。」と述べる。4頁。

- \* 42 「……則芳香不發也」まで、『藝文類聚』卷32「妻又報嘉書」572頁。「今奉越布手巾二枚……(末尾)」が、『藝文類聚』卷73「秦嘉妻與嘉書」1263頁。
- \* 43 『鐵橋漫稿』作「殷勤」, 依『藝文類聚』卷32 (572頁) 改。
- \* 44 『藝文類聚』脱二句, 『鐵橋漫稿』脱「行」字, 依『太平御覽』卷717 (3179頁)。
- \* 45 『鐵橋漫稿』脱二句, 依『藝文類聚』卷32 (572頁)。
- \* 46 「之鑿」, 『太平御覽』『鐵橋漫稿』作「鑿形」, 依『藝文類聚』改。
- \* 47 「還」, 『太平御覽』『鐵橋漫稿』作「至」, 依『藝文類聚』改。
- \* 48 『藝文類聚』脱二句, 依『太平御覽』卷716 (3176頁)。「二量」, 『鐵橋漫稿』作「一量」, 依『太平御覽』(同) 改。
- \* 49 『藝文類聚』脱一句, 依『太平御覽』卷717 (3180頁)。
- \* 50 『藝文類聚』脱二句, 依『太平御覽』卷703 (3138頁)。
- \* 51 「椀」, 『鐵橋漫稿』作「盃」, 依『藝文類聚』卷73 (1263頁)。
- \* 52 「椀」, 『鐵橋漫稿』作「盃」, 依『藝文類聚』卷73 (1263頁)。
- \* 53 徐幹「室詩一首」 「…自君之出矣, 明鏡暗不治, 思君如流水, 何有窮已時…思君見巾櫛, 以益我勞動, 安得鴻鸞羽, 覩此心中人…」(『玉臺新詠箋注』卷1, 37・38頁)。同「情詩一首」 「…君行殊不返, 我飾爲誰榮, 鑪薰闔不用, 鏡匣上塵生, 綺羅失常色, 金翠暗無精…」(『玉臺新詠箋注』卷1, 39頁)。その他, 繁欽「定情詩」, 張衡「四愁詩」等に, 女性の身につける装飾品を羅列・陳列する修辞法が見られる。
- \* 54 『紅樓夢』の主人公, 賈宝玉は性同一性障害者 (Gender Identity Disorder, GID) であるという意見がある。合山究「性同一傷害者小説としての『紅樓夢』- 賈宝玉の人物像をめぐる」(『東方』342, 2009) に概略掲載。それとは直接結びつかないが, (伝統的な観念から言えば) 女性的な情緒纏綿とした情詩をむ秦嘉と, (同じ観念からすれば) 男性的で理知的な書簡文を書いた徐淑という対比も, 文学が表現する性差を超えた男女の多元的關係を示しているよう。

※ 引用原文は旧字による。ただし訓読に旧仮名遣いは用いない。

## 關於秦嘉的情詩

福 山 泰 男

東漢後期桓帝時期的詩人秦嘉，因和妻子徐淑在詩文上的往來，使夫妻二人同時留名于文學史。根據他被保存下來的作品，秦嘉作為郡的官員，因為要做財務報告，出差去了洛陽。但是不忍心把病重的妻子徐淑獨自留在家中，在長期赴任的途中，夫妻間通過互贈詩和書信，以表達離別的相思。秦嘉、徐淑的詩文所展現的，是家人的生病和出差、單身赴任的艱辛，這些再普通不過的夫妻間的日常生活。同時，丈夫和妻子在對等的位置上表達對彼此的思念。並不是思婦對征夫單方向的，而是男女雙方彼此表達心中的感情和別離的不安。從這點看來，可以說夫妻間的作品往來，在到漢魏為止的文學舊習上打開了新的天地。

關於秦嘉、徐淑的作品，以其真偽性為主，值得檢討的地方還有很多。小論把關於妻徐淑的書信、詩及其傳承作為個別課題，對秦嘉殘留下來的數篇五言詩作為中心進行考察。秦嘉的情詩不僅是歌頌男子戀情的五言詩的先驅，在表現的獨特性上也是值得注目的。這種獨特性，是指不僅對自己的妻子進行個別的、具體的描寫，還運用換喻的修辭手法，使女性像更為生動、立體的浮現。

讀秦嘉、徐淑的文本可看出性差的多元性和複雜性。關於文學，從已被固定的性差的意識和觀念中生出新芽這個事實，有重新認識的必要性。秦嘉詩中可以具有陰柔美的男性的情愛表現，從這點中也可以看出漢代詩的獨特魅力。

